



語り手 野沢兵十さん（明治37年生まれ）
収録・昭和51年6月19日

あらすじ

昔、中良（海士町崎地区にある旧家、渡辺家の屋号）にいろいろな宝物があったので、あるとき崎村と多井の若い衆たちが、「なんと今日は、一つ、中良の宝物を見せてもらおうじゃないかと話し合つて、たちまち衆議一決、中良へみんな集まつたげな。

そのとき、崎村の倉屋のじいやが鎧に目を留め、「そのりつばな鎧をわれにも着させてごせな（わたしにも着させてくださいな）」と頼んで着させてもらったげな。ところが、余りに重いため、身体がこわばつて、どうしても立ち上がる事ができません。

「旦那さん、こらまあ、昔の者はこげな重いものを着て、ようやつたもんだあ」と言つたげな。そうしたら、中良の旦那さんはかんかんに怒つて、「おのれ、人の宝を、こげな重いもん」とは何事だ。覚悟せえ」と言つて、刀に手を

かけたげな。それを聞いた崎村のじいさんはびっくりしてしまつて、ポーンととんで出てしまつた。

それを見た旦那さんは、「はははは………」と大笑いして、「じいよ、じいよ、こけ来いな（こへ来なさい）。のしらちや（おまえたちは）まだ本当の心でおらんだけん、いざちゅうときには鎧だり何だり（鎧だろうと何だろうと）重たいもんだねいだわい」と言われたげな。

解説

これはまぎれもなく世間話に属するもので海士町崎地区と多井地区ではよく知られた話のようである。しかし、類話は他地区ではまだ聞いていない。

海士町崎、多井地区は隠岐島の中の島にあるのどかな集落である。このような地区にこそ、ユーモアあふれるこのような世間話の生まれ出る基盤が存在しているのである。

筆者は昭和四十八年度一年間は海士町立海士中学校、次年度から四年間の昭和五十二年度の四年間を島

根県立隠岐導線高校と、通算して五年間を海士町で住んだ経験を持っている。承久の乱に破れた後鳥羽上皇が、流刑になり十八年間を過ごされた地であり、御火葬塚があり、上皇の身辺の世話をした村上家が残されており、代々村上助九郎を名乗り、現在でも御火葬塚守部の役職を継いでいる。

ところで、筆者は隠岐島前高校で郷土部を再興し、部員となつた生徒たちと島前地区はもちろんのこと島後にも渡り、口承文芸を収録したものである。

予算は学校からはもらわず、収録結果を掲載した部報『隠岐島前の伝承』に掲載し、広告を半ページ五千円、一ページ一万円で募り、全国の研究者にはダイレクトメールでPRし、一部五百円で販売したりして経費を捻出して活動費に充て、夏休みには四泊五日の合衆をしながら、隠岐全域の民話などを集めたものである。

（元島根大学法文学部教授）